

2019年2月18日

呉地域の農産物イノベーションプロジェクトについての活動報告

広島大学大学院 久保 祐貴(代表), 宮岸 大輝, 大坪 伸也, 梅木 輝
近畿大学 竹口 真理亜

1. 活動背景と目的

近年、食の安全や地産地消意識の高まりから、農産物直売所の人気が高まっている。しかし、現状では生産者が消費者へ情報発信をする手段や場所は少ないため、消費者は農産物の産地や生産者の詳細な情報を得ることができていない。

そこで本プロジェクトでは、生産者が消費者へ情報発信を行う場をつくり、農産物の価値向上を目指す。

2. 活動スケジュール

[2018年度]

4~6月 現状調査, 生産者への聞き込み
9月 内子フレッシュパークからり 視察
8~10月 実証実験準備
11~12月 実証実験

以上のスケジュールと並行してシステムの開発を行った。

[今後の予定]

4~6月 システム開発, 実証実験準備
7~8月 実証実験
9月 システム改善
10~11月 実証実験
12~3月 システム改善, システム評価

3. 今年度の実施内容

3.1. 情報発信システム

情報発信システム「Vegescan」(ベジスキャン)の開発と実証実験を行った。

Vegescan には生産者や農産物の情報閲覧機能

とランキング表示機能がある。情報閲覧機能では、農産物のバーコードを読み取ることで、生産者や農産物の詳しい情報を閲覧することができる。ランキング機能では、消費者の注目度が高い野菜の上位10品目を確認できる。



図1. Vegescan 生産者の農産物情報ページ



図2. Vegescan ランキングページ

4. 次年度の実施内容

4.1. LINE Bot を用いた情報発信システム

Vegescan の課題として、情報の更新が挙げられ

る。現状では生産者が情報の更新を行う場合には、システム開発者に更新内容を伝え、システム開発者がデータベースの内容を直接編集している。しかし、現状の更新方法では生産者の問い合わせが増えるほどシステム開発者の手間が増加してしまう。また、生産者の高齢化により、複雑な情報システムの操作を行うことが困難な生産者も多い。

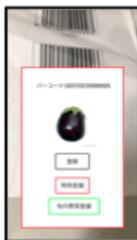
そこで、LINE Bot を用いて対話的に情報の更新を行うシステムの開発を目指す。このシステムは国内で多く使用されているコミュニケーションアプリである「LINE」上で動作するシステムであるため、利用者は普段 LINE を使用している感覚と同じようにしてシステムを使用することができる。また、定期的にシステムから情報の更新を促すメッセージを利用者に送信することで、作付け情報や生産者日記など、これまで定期的に収集することが困難であった情報の収集を行うことができると考えられる。

4.2. Beacon を用いた販売支援システム

本システムは入荷した農産物のバーコードを店員が読み取ることで、特売や旬の情報を登録する。消費者は近くに陳列されている農産物の情報を iPhone 上で確認できる。

店員のアプリケーション

売り場でバーコード読み取りをして登録



参照

登録

入荷情報を参照



消費者のアプリケーション



図 3. アプリケーションの画面

本システムにより、消費者が iPhone 上で近くにある商品の広告情報を確認する事ができる。また、店員はバーコード読み取りのみで入荷状況や広告情報の管理ができる。スタンプラリーによる店内クーポンの配布機能などを追加して消費者に対するインセンティブの付与等を計画している。

4.3 生産者スタンプカードアプリ

協力農家の方の商品ラベルにスタンプ獲得用 QR コードを印字する。QR コードを専用のアプリケーションで読み取ることでスタンプがたまり、一定数集めることで、協力農家の方の野菜が安く買えるクーポン券などを発行するアプリケーションの開発を行う。

このアプリを利用することによって、消費者はインセンティブを得ることができ、生産者はリピーターの増加や生産者情報への関心を高めることができると思う。



図 4. アプリケーションのイメージ図

5. メディア掲載等

2018 年 11 月 16 日

・日本農業新聞 朝刊

2018 年 11 月 19 日

・テレビ新広島 TSS プライムニュース

・RCC 中国放送 RCC ニュース 6

・広島ホームテレビ 5up

・NHK お好みワイドひろしま

・NHK ニュース 845